

YO-U

瓔



2020. 3. Vol.20 No.1 Spring

ケヤキ

深秋の波の音して貝ボタン
立冬のカフス釦の琥珀いろ
裸木や番人のごと立ち尽くし
このケヤキわたしのケヤキもう裸
検査後の気持ちのゆるむ柚子湯かな
お空からジングルベルが降りてくる
さびしさを重ねて紅し冬の薔薇
冬りんご囃むころよき音や夫
ベランダをじやれあふように枯葉舞ひ
雪女木彫りの鏡持ち歩く
寒紅やひらひら手を振り合ひて
大寒やビンに桃色金平糖

はしもと 風里

生家のお正月で思い出すのは百人一首。
子ども達は強制参加。年始客も巻き込んで
一番盛り上がったのは多分両親だった
と思う。子ども達の前にはそれぞれ毎年同
じ札が置かれ、一枚は確実に取れる算段。
わたしの膝の前に置かれたのは小野小町。
「はなのいろは…」意味も分からず考える
こともなく、父が読み上げるのを今か今か
と待っていた。小学校四年生のときに父と
なった人の声は耳に快かった。

高校の古文でうたの意味は分かったが正
しく理解するには至らず。

花の色は移りにけりないつらに

わが身世にふるながめせしまに

今では、わかり過ぎてわかり過ぎて困る
ほどだ。たいそう美しかったとされる小町
さんの落胆はいかばかりだったかお気の
毒。

ティーカップ

おーいお茶ぐいと飲み干すサンタクロース
クリスマスツリーシンプルイズベスト
サンタクロース試着室に行ったきり
アマゾンで届く恐竜と冬青空
ティーカップの螺旋の取っ手冬深む
漱石忌マロンケーキの甘すぎて
時雨くる京都タワーのあたりから
マフラーにかくす素顔と本心と
冬青空ふるさと遠く母遠く
冬うらら眠る予定の大きな樹
枯れ菊となつて空の青さを知る
携帯の電池が切れる冬の鵲

波戸辺 のばり

枇杷の花と石路の花が、私にとっての冬
の花。実家に枇杷山があった。潮風を受け
る南斜面のそこには、十一月から十二月に
かけ、このふたつが咲いていた。

野山でのひとり遊びが好きだった私に
とって、枇杷山はお気に入りの場所だった。
枇杷の花の仄かな香りのなか、海を向いて
「みかんの花咲く丘」を大きな声で歌った。

母方の祖母は春になると、大量の石路を
採ってきて町の市場に出荷した。下処理が
大変で、皮むきを手伝わされた。指が灰汁
で黒く染まるのは嫌だったがお小遣いをも
らえた。どこで採ってくるの聞いても、
いつも「それは秘密」と笑うだけ。

祖母が亡くなった時、通夜の席で「ばあ
ちゃん、最後まで石路の採れる秘密の場
所を教えなかったなあ」と、みんなで大笑
した。

ブロッコリ

冬の星ずっと友だちでいたいね

冬青空祖母の入院初日かな

冬青空黄色く光るとが好き

冬紅葉手術はうまくいきました

十二月試験の出来にほくそえむ

冬の虹誰もが口を開けている

変なこと話しかけない鴨好きよ

白葉牡丹花屋の隅を地にするよ

バス停の綿虫バスに乗らないね

人見君の頭を思うブロッコリ

室外機だけが元気で冬の庭

手袋より顔出す美しいネイル

林田 麻裕

花粉症の時、鼻が詰まった。

花粉が飛んでない今、鼻が詰まっている。点鼻薬の使いすぎだと思ふ。ネットに書いてある、あらゆる鼻詰まり対策を試している。あるホームページには、それらの対策を三ヶ月以上続けないと効果はないそうだ。

耳鼻科に行けばいいじゃないかという方もいると思う。実際、母は一時耳鼻科に通っていた時、鼻詰まりはなかったそうだ。

でも耳鼻科は怖い。色々な器具を鼻に突っ込まれる。耳鼻科医の腕を掴んで治療を中止してもらった思い出がある。

そういうわけで、ネットの鼻詰まり対策を三ヶ月試すことにする。三ヶ月後が楽しみだ。

花のエッセイが鼻のエッセイになってしまった。どうかお許しを。

遠縁

栗ごはんふたりぼっちが身について

あたたかな冬です君を思っては

生前も死後もおんなじ冬日向

遠縁の山姥に編む毛糸帽

齒科眼科耳鼻科ユニクロ歳の市

霰打つ出窓ガラスの眠り猫

浮寝鳥いま一生のどのあたり

雪おんな三年たてば雪ばんば

屋根裏のロシア人形寒月光

集まって笑っておれば日脚伸び

冬あたたか駅の影絵のカルテット

待春の冬子夏子の老姉妹

火箱 ひろ

「環」の表紙裏の「花の首飾り」は二号、春から始まった。当初は三年程で会員の住む町を訪ねて終わるつもりだった。形を変えてその後十年続いている。

七色の京の飴さん春淡し 辻 水音
水仙の香り一休さんの恋 火箱游歩

これが水音さんを訪ねた①京田辺での俳句。京田辺にある酬恩庵一休寺を二人で楽しんだ。十年前のことだがありありと思ひ出す。あの日の水仙の香りもしてくる。句の記憶というものもあると認識する。

私はまだ「静歩」だったんだー。しみじみ。ばらばら懐かしくめぐっていく。

このときのエッセイのお題は「手帳」だ。年長の風里、水音、ひろの三人は、亡き親の手帳に触れている。それぞれ直筆の字をみて、遠い記憶に胸を詰まらせる。

私はそれを読み、また懐かしく胸がいっぱいになった。

冬北斗

松井 季湖

ナナフシの寂しき影を連れ歩く
茶の花やあわてるなよとちちの声
佳き日きよう南京櫨の実を踏んで
手になじむ暮らしの道具冬ぬくし
グツグツと厨に冬の音満ちて
冬こおろぎ静寂まとい歩みおり
するすると森から暮れて冬北斗
荒星や母あんしんの乳ボーロ
綿虫を指に遊ばせ人恋いぬ
サンタさんボクいいおにちゃんしてる
母を見る気持ち新たに初湯かな
初仕事髪きつちりと結びあげて

小学校の通学路の途中にレンゲ畑があり、春になって紅紫色の花が咲き、畑一面が絨毯を敷きつめたようになるのが楽しみだった。
下校時、毎日のようにレンゲ畑で道草をし花かんむりや首飾りを作ったりして遊んだものだ。花の絨毯となれば、寝ころがりたくなるのは当然で、私も寝ころがったり、ごろごろころげ回ったり、でんぐりがえりをしたり……
とある日のこと、ごろごろが佳境に入った頃「コラーッ！」とおじさんの声。「そこでころげ回ったらあかん！」ヒエーッ！びっくりした私達は、ランドセルを手に走って帰ったのだった。
当時、牛を飼っている家が多くあり、レンゲはその飼料になる。畑をころげ回ってレンゲがベッチャンコになったら刈り取りにくくなるのだと、あとで父から聞いた。かくして、私達道草組の楽しみは消えてしまったのだった。

ベートーベン

おーた えつこ

ベートーベン似の梟よ雌ですよ
アンティークボタンいろいろ冬燈し
真夜中の毛糸靴下かたっぽう
あちこちに沼のある地や寒の月
花、鳥、木、刺繍生まれる炉端かな
カステラの端をこそげて冬ごもり
切り干しを噛めばぼちつと点く記憶
冬座敷俳句アタマを並べけり
裏庭のすみの冬草よく育ち
冬の駅鏡の中の私かな
「待ってる」と返事があって冬鷗
フライドポテト買えば真冬の海がそこ

白木蓮の蕾がふくらんでくるのを見ると眠くなる。ふわっと優しい白いベッド。
蓮や睡蓮の蕾も同じようなものかもしれないけど、私は船酔いするたちなので、水面で浮かぶものはちよつと躊躇。何の話？いや、花の中に住みたいなあつて話。
チューリップは良いよね。おやゆび姫公認。
お姫さま公認といえば竹だつて良いわけだけど、あれは、おつちよこちよいの爺さまが変なとこに斧入れちゃう可能性を考えるとね。やつぱりちよつと躊躇。花じゃないし。
スノードロップや桜の蕾にも心惹かれるものはあるけど、下向きに咲くから突然開花したら、落ちる。
薔薇？うーん、花びら多すぎる気がする。
朝顔は、朝寝坊禁止。そもそも蕾ネジれてるし。
「そらまめくん」っていう絵本があるんだけど、そらまめくんのベッドはそら豆の鞘！そういえば、おやゆび姫のベッドはクルミの殻だったな。

ポインセチア

放物線描くボールや冬青空

ピアニストのエナメルの靴冬銀河

温室にゆさゆさ育ちゆくバナナ

眠るまで赤い毛糸を指で編む

まきストーブ得体の知れぬもの煮えて

咳き込めば希薄になってゆく大気

歳末の足型測定いたします

冬の雷かわいい婆さんなんていや

君ひとつわたしはみつ十二月

雲雀丘花屋敷駅冬紅葉

ポインセチアきびきび皿をさげていく

畦道の赤い手袋明日は雨

たかはし すなお

父も母も花を育てるのが好きだった。舅も植木鉢に夕顔、月下美人などを育て庭木の手入れもしていた。姑はその庭の花を切っては茶室に飾っていた。私は育てるのも飾るのも、どちらかと言うと苦手。

スポーツジムへの行き帰り、農道の脇に咲いている花を見ては、心が和む。春先は足取りが軽くなる。大犬の陰囊が地面に這うように咲き始めると、紫鸞苔や仏の座、姫踊り子草など青、紫色の花が次々に咲きだす。そして蒲公英の登場だ。初めのうちは地面の近くに咲いているのだが、見る見るうちに茎が伸び回り一面蒲公英だ。それが綿毛になる頃、露草が咲き始める。

このような花は、類人猿の時代から咲いていたのだろうか。もしそうなら花を見てどう思っていたのだろうか。

こじ あきい

落ち葉踏む知らない町の木の匂い

おじいさん松ぼっくりが落ちまして

紅葉散る散るその音を拾う

森の日だまり終咲くの咲かないの

冬暖か森の子どもが生まれるよ

胎内にいた日冬の空しんしん

裸木のところどころに「」

ゆずり葉の分家の分家奥田くん

百三歳蒸し饅頭を待っている

近ごろは冬の林檎のせいにして

本棚はみな木の匂い冬暖か

虹色の魚が泳ぐ久女の忌

嫁いだ頃はまだ少しの田もあり、農繁期には兄弟が集まって手伝った。そんな頃、長男が生まれた。先生からのお達しで、人並み以上ぎりぎりまで辛抱して入院。そのお蔭で二時間ほどで生まれた。ただ、色々お土産付きの出産で、人より少し長目の入院。三日目頃、義母が見舞いに来てくれた。昔の人らしく「こ苦労さんやったなあ。元気でよかったなあ」と日焼けした顔は本当に嬉しそうだった。「忙しいから遅うなって」と、花びらを散らしながら新聞紙の包みを解いた。コスモス、薔、水引。狗尾草、秋明菊、杜鵑、野紺菊、芒。あつという間に部屋は野の花の香りでいっぱいになった。

「町の花屋さんには綺麗な花があるのにこんな花をなあ。私のために仕事の合間を縫って花を摘み、山道をバスに揺られて来てくれた母の気持ちが何よりも嬉しかった。

母のいない山里は段々遠くなる。この頃、野紺菊の濃紫は母の色だと思っている。

ぬれしみあり

辻 響子

手話で指示主治医大きなマスクして
枯庭の墓に納めし金魚A
犬逝つて大きくなつて柚子湯の子
さくらのぞみひかりこだま年惜しむ
薄明の一輪挿しの梅の花
姉のめくばせうなずく妹かるたとり
あらたまの弾む少女の黄八丈
初伊勢ややつぱり甘い伊勢うどん
着ぶくれて坊主めくりの殿と姫
初晴や息子は育児休暇中
白菜を煮るだけ夫とふたりの日
寒籠りぬれしみありと図書の本

私の春は白から始まります。雪柳、小手毬、大手毬、木香薷、白木蓮、羽衣ジャスミン。足下にはイキシア、水仙、カモミール、カラ、そして段々と黄色やピンクが揃います。エニシダ、秋海棠、クレマチス、ルピナス、ペロニカ、ロニセラ、切りがありません。
春は忙しいです。昨日まで固かった芽が、まるで号令がかけられたかのように一斉に開くから、毎朝声を掛けて回るのが日課になります。オハヨ、元気ですか、具合は悪くない？綺麗ですよ、真っ直ぐ伸びましようね。すると答えます、ありがとう私達は幸せですよ。手塩に掛けるとはこんな事です。私の心は一日中温ったかくなります。
二十才の時に、毎日通っていた雑貨やさんでロダンセのドライフラワーを買いました。歳をとったら、自分で育てた花の絵を描いて過そうと、その時なんとなく思いました。
だから描きますね、あなた達花の絵を。また楽しみが増えました。

おあげさん

辻 水音

いつからだらうマネキンのニット帽
ボアの膝掛生きててもいいですか
冬ぬくし園児の数をフラフラプ
原つぱとつながつてゐる冬夕焼
飛行機雲を編むやはらかな冬陽
冬萌や服薬日誌投げすてて
夫が腰たたんで歩くちゃんちゃんこ
新しいマスクに替へて友に会ふ
会ひたくてちよつとふにやふにや女正月
箸の帯切る草石蚕カリツと喰む
冬深むこんがり焦がしおあげさん
釜の蓋覗いてみれば寒明ける

埼玉県の友達のところへ遊びに行った折、若葉の香る山へピクニックに出かけた。なだらかな山肌、図鑑で見えないいろいろな植物が群生していて、その情景はずいぶん前なのによく覚えている。
碓草、叡山童、二人静、破れ傘、童袋、都忘れなど…頂戴して京都へ持ち帰った。
この碓草は常盤碓草というらしい。我が家のなかでも日当たりの良い特等席に居て、白い花がシャリシャリと風に揺れていた。叡山童は京都には馴染み深く、か弱さと可愛さの二重奏。二人静は地植えにして、毎年増え続け狭庭を緑色に染め花は楚々として清らかだ。破れ傘はいつもすねてようで悲し気だ。「何で連れてきたの？」と責められてるような。都忘れはこれも地植えしてから毎年淡紫の花をつけてくれて、まっすぐに茎が立つ姿が好きだった。
五年前、土のない暮らしになりこの子たちを置いてきた。本来豊かな山や森で輝いて育つべき草花たちに、気の毒なことをしたなあと思う。